



青山 君子さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：12月12日

お世話になったご近所の方・患者さんに感謝を伝えたい

震災前は「青山健康治療院」を経営していた青山さん。現在は娘さんが住む神奈川県で暮らしています。今回は、連絡が取れなくなっている方に「今までの感謝の気持ちを伝えたい」という一心でお話しをさせていただきました。現在は、交流したり外出したりする機会が減った青山さんですが、時々電話や福島訪問が青山さんの気持ちを支えているそうです。



■月1回の運動教室が楽しみ
娘が住む神奈川県に避難していたことから、現在の伊勢原市での住まいを決めました。今の暮らしでは、地域包括支援センターの方からお誘いいただいた「運動教室」を楽しみにしています。簡単な運動をして料理を作ることもあります。ですが、すでにいくつかの仲良しグループになつているので、自分は溶け込みにくいかと心配していましたが、運動教室の実行委員にお声かけいただき、おかげで企画や準備作業を通じて交流する人が増えました。ここでの出会いを通じて、「青山健康治療院」を再開することもでき、現

■2、3ヶ月に1回は福島に帰ります
普段は変化の少ない日々を過ごしていますが、福島へは2、3ヶ月に1回は帰って1週間ほど滞在しています。私の家族や親族は現在バラバラに暮らしているのですが、福島に帰った際

■できれば早く浪江に帰りたい
浪江での暮らしで思い出されるのは、近所の方との交流や患者さんと山菜採りに出かけたりしたこと。十日市やお不動さんのお祭りも思い出しますね。我が家では平成13年にお墓を新しくしたばかりでした。お墓からは泉田川のほとりの桜の木々が見えて、心が和みます。墓掃除にもよく通ったものです。今まで苦労して整えてきた土地や建物などもあります。思い出も沢山あるので、浪江の家をリフォームし暮らせるようなら戻りたいと考えています。ただ、この点については家族でもいろんな意見があるところで

■転々と避難し現在の場所へ
震災が起こった直後の数日は、訳もわからず避難を続ける日々でした。鬼久保にある自宅を逃れ、まずは親族が住む双葉に避難。その後、津島、川俣、いわき、横須賀、平塚と避難をして平成23年5月に神奈川県伊勢原市に落ち着くことができました。当時を振り返ると、着の身着のまま過ごし、避難先ではお世話になりながらも厳しい日々だったな、と思ひ出されま

は、いわき市や福島市に住む家族に再会したり、浪江の自宅のご近所さんだった方や当時の患者さんらと会って話を楽しんでいます。特にご近所だった小峰さんにはとてもお世話になっていて「交流があった患者さん方に会いたいよね!」と言ってくれるので、数力所の仮設住宅を回って再会のお手伝いなどをしてくださいます。

浪江のこころ通信

・第44号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

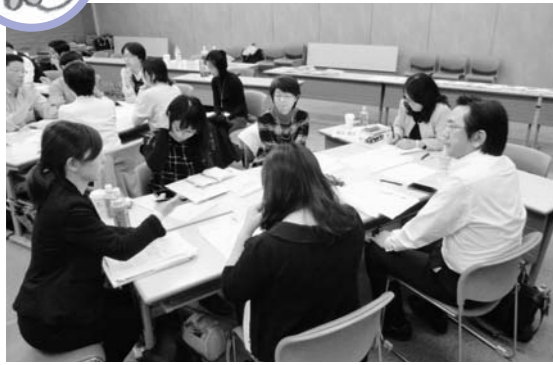
浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第44号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





鍋嶋 町民としての意識や心のつながりを保つていくことを、町の広報誌として続けていくのは大切だと思います。文章を短くするなど、もう少し気軽な形で取材を受けていただくことはできないのかな、と思っっています。

宮口 今年度から何名かの方に一度に取材に応じていただく「グループインタビュー」を始めたいです。さらに、町にゆかりのある人として、進学や就職などで町を離れた方にインタビューするというアイデアも出てきています。これからの浪江を背負っていく方々に取材していけば違う視点が見えるかもしれないですね。

伊集院 浪江町にいた時と同じように、歌や踊りの練習に励んでいる団体、作品づくりをしているグループの方々に、今こんな活動をしていて楽しくやっているよ、という内容を伺っても良いと思います。

宮口 町の復興に向けて「どこにいても浪江町民」というビジョンを掲げていますが、それに向けて具体的にこなができる

浪江のこころプロジェクト

取材協力者情報交換会が開催されました。



「浪江のこころ通信」では、全国各地の協力者に、町民の声の取材をお願いしています。全国の取材協力者が集う情報交換会が、昨年11月9日(日)郡山市内にて開催されました。

当日は、北は秋田から南は沖縄まで取材協力者15名が参加。取材を受けたことのある町民や町も交えたパネルディスカッションが行われ、「通信」の現状と課題、今後のあり方などについて議論を深めました。

「浪江のこころ通信」

これからの

のかが課題になっていきます。その意味からも、「通信」は大切です。町の広報という取材を受ける側も構えてしまおうと思っますが、ぜひ本音で話して欲しいです。

櫻井 「通信」は、個々の想いの記録、ということを大事にしてきました。数で表わされるような被害状況は記録として後世に残りやすいのですが、災害に巻き込まれた方の個々の想いはな

かなか残りません。未曾有の災害に見舞われた浪江町では、その一人ひとりの想いを記録しておくことが大切だと考えて「通信」を始めました。

皆さんの話から、このような「通信」の重要性は変わらないうと感じました。一方で、その意義を発信し、より多くの町民の皆様が協力いただけるように、努力していくことも必要です。

「浪江のこころ通信」の現状と課題

櫻井 「通信」を始めて以降、多くの町民の声を届けてきましたが、時の経過とともに取材に応じていただける方が少なくなるなど、課題も出てきています。

鍋嶋 「通信」が始まった頃は、震災の様子や避難の経緯、今の暮らしのことについて話して他の人と共有することで、気持ちに楽になられたのではないかと思っています。今自分がここで暮らしていることを発信したい、という想いも感じられました。

最近では、将来は町に帰りたいという想いと、子や孫が安心して帰ってこられる家を早く整

えたいという想いとの間で悩んでおられる方が多いと感じます。

お話をいただく内容は自由なのですが、「通信」では自分の「決意表明」をしないといけない、と重くとられてしまっているのではないのでしょうか。

伊集院 私が取材を受けた理由の1つには、ピアノ教室の教員に自分の居場所・状況を知らせたいということがありました。実際に「通信」に掲載された後は、いろんな方から連絡をいただき、つながることができました。

その後、今の居住地に移ってきてから、2度目の取材を受けました。その時もいろいろお話をしましたが、後日、広報誌に

パネリスト

- 伊集院 律子さん
町民(浪江のこころ通信第1号・第32号掲載)
- 鍋嶋 洋子さん
取材協力者(ちば市民活動・市民事業サポートクラブ)
- 宮口 勝美
浪江町(復興推進課課長)

コーディネーター

- 櫻井 常矢さん
(高崎経済大学教授・浪江のこころプロジェクト プロジェクトリーダー)

パネルディスカッションでの議論を受け、参加者全体で意見交換を行いました。

■これからの「通信」に期待すること

- 町の広報誌に多様な意見が掲載できるのは大切なのでぜひ継続を。
- 浪江について話し合える場、情報交換の場となって欲しい。
- 子どもたちの気持ちが聞きたい。
- 浪江とつながりたい、という思いを大切にしたい。
- 十人十色で多様な中身が魅力になる。

■取材方法の工夫・提案

- 「取材」だけではなく作文、メッセージなど、町民の方からの発信も。
- 中学校・高校の同窓会や、サークル、スポーツなどのグループの紹介を。
- 季節のことや地元のこと、町の風景といったテーマの設定も。
- 今の居住地でのつながり、支援頂いた方・団体と一緒に取材することも。

今回いただいたアイデア・ご意見を踏まえて、よりよい「浪江のこころ通信」のあり方について、引き続き検討してまいります。読者の皆さんからもご意見・ご感想をぜひお寄せください。

【連絡先】 〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
E namie12030@town.namie.lg.jp
TEL 0243(62)4731



載る内容として本当に話したい内容だったのかな、と迷ったことも正直ありました。

宮口 個人的にはいろいろ話してくださる方でも、「通信」には載せて欲しくないという方が多くなっています。個々の選択はそれぞれ十分に悩んだ上でこのことなので、その結果が良い悪いということはないのですが、やはり人の目が気になってしまっているのでは。

悩んでいるのは自分だけではなく、みんな同じなんだ、ということも「通信」を通じて伝えていきたいのですが、現実なかなか掲載に至っていません。

取材協力者 「通信」に知人が載っている、元気にやっている様子を見ると、自分も元気になります。個人的には、通信はぜひ継続して欲しいと思います。

私は町民として取材を受けたこともありますが、掲載号を当時働いていた職場で回覧していただいたりもしました。浪江以外の方にも、町民の想いを伝えていく役割があると思います。

取材協力者 遠方に避難された方の中には、震災以降、町とのつながりが薄くなっている方も多く、今、想いを発信したい、つながりたいと思っっている方が多くいらっしやるように感じます。